

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第174号 平成23年10月25日

津軽海峡・冬景色

この歌が、心に染みる頃となりました。

上野発の夜行列車、おりた時から
青森駅は雪の中、北へ帰る人の群れは
誰も無口で、海鳴りだけをきいている
私もひとり連絡船に乗り、
ここえそうな鷗見つめ泣いていました
ああ、津軽海峡・冬景色

阿久悠さんの作詞、三木たかしさんの作曲になる「津軽海峡・冬景色」は、名曲だと思います。

私にとっては、津軽海峡も青函連絡船も、若かりし頃の自分と重なって、鮮明に脳裏に焼き付いています。

私が20代の頃は、北海道と本州を繋ぐ手段は青函連絡船でした。東京に就職が決まり、生まれて初めての一人旅で北海道を離れる時の事は、今でも忘れることができません。銅鑼の音が響き、別れのテープが風に舞う、そんな情景の中で、4時間程の船旅にもかかわらず、とても遠くへ旅立つ感じがしました。

東京から、正月などに帰省する時は大変でした。上野駅から夜行列車に乗り、青森駅で青函連絡船に乗り換えるのですが、家に着くまでに20時間近くかかっていたように思います。上野駅は、東京駅とは異なり、独特の臭いがありました。それは、故郷の臭いといっても良いかもしれません。上野駅でも青森駅でも、土産の入った大きな荷物を抱えた出稼ぎの人が大勢いて、皆無口だけれど、心は故郷に一心に向かっている、そんな感じがして切なさが伝わってきたものです。

当時、一緒に仕事していた仲間で、今も東京やその近郊で暮らしている者が沢山いますが、私は、どうしても、東京に自分の居場所を見つけることができ

ませんでした。だから北へ帰るという言葉は、余計胸に響きます。

「北」という字は、左と右の人間が背を向けて立っている様子を表していて、そこから敗北という言葉があるように、背を向けて逃げるという意味にも広がったといわれています。「津軽海峡・冬景色」は、愛に破れた一人の女性が、今まさに都会に背を向けて故郷へ帰ろうとしている、そんな情景を歌ったものです。そして、その故郷は、北国北海道でなければ絵になりません。

石川さゆりさんが、昭和53年に「津軽海峡・冬景色」を発表すると、瞬間に大ヒットします。石川さゆりさんの、体の芯から絞り出すような哀感を含めた歌声は、多くの聴衆の心を揺さぶったのだと思います。

ごらんあれが竜飛岬、北のはずれと
見知らぬ人が指をさす、
息でくもる窓のガラスふいてみたけど、
はるかにかすみ見えるだけ
さよならあなた、私は帰ります
風の音が胸をゆるする泣けとばかりに
ああ、津軽海峡・冬景色

そして、9月28日、「津軽海峡・冬景色」の発表の年に生まれたアンジェラ・アキさんが、ニューアルバム「WHITE」の中で、「津軽海峡・冬景色」をリリースしています。ピアノを弾きながら歌うアンジェラ・アキさんの歌声は、石川さゆりさんとは全く違う世界を私たちに見せてくれています。

石川さゆりさんが歌った演歌「津軽海峡・冬景色」に、アンジェラ・アキさんが新しい命を吹き込んでくれた、そんなふうに感じますが、残念な事に、歌の舞台となった青函連絡船は、もう既にありません。(塾頭 吉田 洋一)